

# 余命宣告された僕の最後の一週間の物語

～貴方は余命宣告された時、何をしますか？～

書名

世界から猫が消えたなら

著者名

川村 元氣

発行所

小学館

発行年

二〇十四

世界から  
ら猫が消  
えたなら

ストーリー

郵便配達員として働く三十歳の僕。僕は平凡な毎日をおくりていたが、ある日、脳腫瘍で余命が残りわずかであることを宣告される。そんな時に、僕の前に悪魔を名のる自分そっくりの男が表れる。そんな悪魔は僕にとんでもない取引をもうかける

推薦の言葉（感想やこの本のよさ）

この本のよさは、「読んだ後に『考えさせる』」というところだ。僕は一日の命を得るために世界から様々なものを消した。見ると消えても世界は変わらないが、その「モノ」には人の出会い、思い出、記憶があり、それが消えてしまうということはそれらが全て消えてしまうということだ。この本は、「もし」そのものが消えたなら、「もし」その人との思い出がなくなら、という「もし」という自分ならどうだろうというかたりかけもような内面にはつている。



この本を推薦するのは、2年2組（鈴木 陽向）です。